

# 吉井源太と明治

《15》

## 「コッピ紙」が好評

吉井源太が明治十（一八七七）年の第一回国勸業博覧会に「薄様大半紙」として出品した紙。

これが審査された結果、輸出用としてコッピ紙に適するという評価を受けて賞を受けた。以後、名前を「コッピ紙」に変えた。「日本製紙論」にある。この紙は、「圧写紙」ともいわれる。

圧写というのは、原版に書いてあるインキ文字の上に紙を何枚か重ねて、上から圧力をかけて一度に何枚もの紙に写すことが基本的な使い方だったらしい。

紙は、薄くて滑らかであることが重要になる。普通の紙で、一度に八枚重ねて写せたが、源太の漉いた紙では、十六枚を重ねても全部に文字を写すことができたようだ。

この紙は最初、雁皮のみ

で漉かれた。後に三極が混ぜられるようになる。この混合比によって等級がつけられた。最高級品はやはり、雁皮のみで漉かれた紙だ。しかし、雁皮はほとんど栽培できず、大変貴重な原料だったので、雁皮のみの紙を大量に製造することはできなかった。それに近い紙が漉ける三極が使えるようになったことで、大量に製造できるようになった。

この紙の輸出は同十七（一八八四）年に途が開けた。同二十三（一八九〇）年に輸出が盛大になっていく。そして、同二十五年頃、粗製濫造がおこり、輸出が頓挫してしまう。当時よくあった経過をたどってしまった。

その後、品質管理を厳しくする努力がなされたことで、また輸出が持ち直して

いく。

同二十六（一八九三）年の日記には、「今では海外への販路が広がり、土佐七郡のうちほとんどのところ

で腕の良い製紙人は皆、この紙に取り組んでいる」という状況を知らせる手紙の下書きがある。また、「こ

のことは高知県の経済を潤しているが、自分が明治十年から望んでいたことが現実になった」として喜んで

いる様子もわかる。同年の日記には、交流の

あった地方の紙製造業の人に、高知での様子を知らせている記述がある。横浜と

神戸の二つの貿易港の商人が高知へ入り込み、支店を開こうという計画が出てきたという事だ。輸出品として大変有望視されていたことがよくわかる。

源太は同三十（一八九七）年には神戸に立ち寄り、日本紙貿易株式会社と

いうところで、この紙の売れ行きなどを話している。この支配人から「コッピ紙は、海外ではタイプライターというものに用いられます。今は検査が行き届いていますが、注文が多くなつて粗製濫造になっては困ります」という話があったことなどが書き留められている。



明治39年の日記にある「粗製濫造禁す」の文字（いの町紙の博物館蔵）

同三十六（一九〇三）年には、コッピ紙一万枚を東京日本橋の丸善株式会社を送り出した記録もある。このころは、タイプライターが発明されて約三十五年。だんだん実用的になってきた時代。その印字方法も、直接インキをつける、リポンの上から打つ、カーボン紙をはさむという各種の方法が混在していた。（京大大学院研修生、京都府在住）